

第1回ローカル・ゼブラ・エコシステムの構築に向けた社会的インパクト評価の活用実践に関する研究会 議事要旨

- 開催日時: 2025年8月1日(金) 10:00~12:00
- 場所: 大手町パークビルディング 15階および Teams のハイブリッド開催
- 出席委員: 今田座長、岡本委員、工藤委員、田淵委員、千葉委員、並木委員、福田委員、松場委員、山口委員（※安部委員はご欠席）
- オブザーバー: 環境省 大臣官房地域政策課、金融庁 総合政策局総合政策課、国土交通省 国土政策局総合計画課、農林水産省 農村振興局農村政策部、総務省 地域力創造グループ地域政策課

※座長以下 50 音順で記載

① インパクト活用実践研究会の設立目的やディスカッションポイントに関する各委員の問題意識の共有

1. インパクトを面として捉える必要性

- ローカル・ゼブラ（地域の課題解決を目指すゼブラ企業）が単体で社会的インパクト（社会に対する良い変化）を創出することは難しいため、ローカル・ゼブラを束ねてエリア全体を評価することが重要である。また、ローカル・ゼブラと連携先の二者間の関係に閉じるのではなく、面として捉え、関係者全体が利益を享受できる構造が求められる。それによって支援者や投資家がより容易にローカル・ゼブラに関与できるのではないか。
- ローカル・ゼブラにはスタートアップにとってのベンチャーキャピタルのように成長を支援する存在がいない場合もあることから、ベンチャーキャピタルに代わる支援者を地域内外で生み出すことが重要である。

2. 対話の重要性

- ローカル・ゼブラ企業が社会的インパクトを創出する方法や、それに対して全国規模の企業や金融機関との関わり方について対話できる場を持つことが重要である。例えば、自社の事業がどのようにインパクトを創出しているか、その過程を説明するために作られるロジックモデルは地域内外の関係者間での対話の際に説明材料として活用でき、目線合わせに有効である。
- 一方で、インパクトという言葉が前面に押し出しすぎると、対話に支障をきたす場合もあることから、言葉の使い方や説明の仕方には配慮が求められる。

3. 経済性と社会性のバランス

- 関係人口として関わる人々が、地域の事業に関与することや、資金提供を行うことが難しい理由の一つとして、社会的インパクトは地域から離れるほど享受しにくくなり、収益性が重視される傾向がある。経済性と社会性は二律背反に陥ってしまう場合もあるものの、両立させることが事業推進においては不可欠である。例えば、経済性と社会性の双方が重要であるとしたうえで、最終的には社会性を重視する価値観を持つ地域もある。

② 経済性と社会性の両立のための関係者との対話の方法

- 投資家や金融機関に対しては、利回りや収益率など、経済性を示す指標を共通言語として対話することが重要である。ただし、経済性を示す指標と地域の歴史や文化などの文脈（コンテキスト）を含む社会性とのバランスは、対話の相手によって使い分ける必要がある。
- 社会性と経済性では想定する時間軸が異なり、社会性に資する事業は成果が顕在化するまでに一定の時間を要する。さらに全国規模の企業においては、株主など社外への説明責任もあるため社会性のみに訴えることは難しい。実際に株主らが社会的インパクトの現場を体験し共感を醸成することで、異なる時間軸に対する理解を促す可能性がある。

③本研究会のゴールについて

- 現時点では、ローカル・ゼブラと全国規模の企業や金融機関が相互に利益を享受できる関係が構築されていない場合や、その可能性が見出しにくい場合も存在する。今後の研究会では、こうした関係者を特定し、彼らの「Win」をどう設計するかを検討すべきである。

以上